

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅰ 対人支援者としての基礎・基本を学ぶ 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-1-1	国家資格としての公認心理師	I	○	公認心理師の成立までの歴史とともに国家資格化の意義を学ぶことを通じて、主に①法の下での責任感や倫理観、②社会の付託により、国民のために働くことの意味、③名称独占資格であることと自己研鑽の必要性、について理解を図りたい。その上で、今後公認心理師としてどのように学び成長していくのかについて、一人一人が考える内容とする。	村瀬 嘉代子(公認心理師試験研修センター、顧問 大正大学、名誉・客員教授)	◎	41分 42分
		II					
		III	○				
		IV					
		V	○				
C-1-2	基本的人権の尊重と今日的課題	I	○	世界人権宣言以降の日本における人権に関する認識の展開や日本国憲法の定める基本的人権について学ぶことを通じて、人間の固有の尊厳や個人から派生する多様性の理解の端緒とする。実務者として、生命、身体、安全、発達の権利など、現代社会における様々な課題を知り、当事者のニーズを把握することや、権利擁護の視点を持てるような内容とする。	岩佐 嘉彦(日本子ども虐待防止学会理事長、弁護士)	◎	60分
		II	○				
		III					
		IV					
		V					
C-1-3	人々の権利を守る社会制度の仕組み	I	○	性別、人種、障害などにより、差別や偏見などを受けやすい、いわゆる社会的少数者(マイノリティ)といわれる当事者の現状を知り、当事者が求めるニーズや、支援を行うための法律や制度を理解する。実務者として、人々の多様性についての理解と最善の利益を追求することの意義を理解できる内容とする。	増沢 高(子どもの虹情報研修センター、研究部長) 高橋 温(NPO法人子どもセンターてんぼ理事長、弁護士) 畑山 麗衣(NPO法人Giving Tree、ピアカウンセラー)	△	48分
		II	○				
		III					
		IV					
		V					
C-1-4	生命倫理	I	○	人工授精や臓器移植など、科学の進歩に倫理観が追いつけていない問題がある。今後はますます既存の価値観では捉えきれない多様な状況に置かれることが予想される。このような状況において、実務者が何を基準に物事を考えていけばよいのか考える機会とする。	香川 知晶(山梨大学、名誉教授)	◎	67分
		II	○				
		III					
		IV					
		V					
C-1-5	人間のこころにひそむもの	I	○	人間が社会生活を送る上で、法律や規範を逸脱してしまうことがある。例えば、精神障害を有して、判断能力に欠いているときである。そのような場合、その人に治療を優先すべきか、刑罰を選択すべきかが問題となる。罪を人間はどのように考え、どのように支援すべきか、考え続けていかなければならない根源的な本質的な問いである。このような事例を通して人間理解を深められる研修内容とする。	森岡 正芳(立命館大学、教授)	◎	60分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅰ つづき 対人支援者としての基礎・基本を学ぶ 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
Ⅰ 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
Ⅱ 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
Ⅲ 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
Ⅳ 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
Ⅴ 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-1-6	法制度と職業倫理のジレンマの中で	Ⅰ	○	職業倫理は、単に法律上の規定に基づきそれを遵守することによって担保されるものではない。特に心理的支援の実践においては、しばしばジレンマが生じる。法制度に対する葛藤を抱えながら、心理専門職としての倫理観に基づき支援を堅持しなければならない機会も多くある。具体例をもとに公認心理師をめぐる法制度の職業倫理の課題を改めて意識し、実務においてしばしば生じる、例えば支援者と被支援者との適切な距離を保てなくなるような場面を通して、実践的な倫理問題に触れ、一人ひとりが適切な心理的支援とは何かを考えるようにする。	古村 健(国立病院機構東尾張病院、心理療法師)	◎	61分
		Ⅱ					
		Ⅲ					
		Ⅳ					
		Ⅴ	○				
C-1-7	多職種連携・協働の理念	Ⅰ		対人援助において、なぜ多職種連携が必要なのかを掘り下げ、その基本的な理念、協働の意義と面白さについて学ぶ。多職種連携において協働でできること、心理職としてできること、その姿勢について学ぶ。5分野における多職種の機関の性質や機能、職種ごとの仕事内容や現状、援助者の価値観などを理解し、具体的にどのような連携ができるのかを取り上げる。	中尾 智博(九州大学、教授) 石隈 利紀(東京成徳大学、教授)	○	74分
		Ⅱ					
		Ⅲ	○				
		Ⅳ	○				
		Ⅴ					
C-1-8	連携・協働に必要な実践力 ①情報共有するための事例の記録と報告	Ⅰ		多職種連携・協働には対人援助職の持つコミュニケーション力が重要である。ここでは情報の共有に焦点を当てる。どのようなタイミングで、いかに適切に情報共有できるか、どのように伝達するか、その課題と在り方について理解する。さらに、情報と援助方針を共有するための記録・報告の具体的な方法について学ぶ。	増沢 高(子どもの虹情報研修センター、研究部長) 橋本 和明(国際医療福祉大学、教授)	○	60分
		Ⅱ					
		Ⅲ					
		Ⅳ	○				
		Ⅴ	○				
C-1-9	連携・協働に必要な実践力 ②連携・協働するためのコミュニケーション・相互コンサルテーション	Ⅰ		多職種連携・協働のプロセスに焦点を当てる。心理職は、コンサルタントにもコンサルティにもなる。コンサルタント、コンサルティとしての態度・スキルを獲得する。	三宅 美樹(株式会社トヨタ車体研究所) 田村 節子(東京成徳大学、教授)	○	95分
		Ⅱ					
		Ⅲ	○				
		Ⅳ					
		Ⅴ	○				
C-1-10	心理職としての成長とトレーニング	Ⅰ	○	心理職としての力量を高めるために、必要な事柄について広く理解し、自身が成長していくために心がけることやそのための実践的トレーニング、学びの方法等について知ることとおして、日々の業務にあたる基本的姿勢を考える。本研修では、心理職としての実力を磨くための訓練方法を紹介するとともに、心理職者の成長過程等に関する研究結果を参考に、心理職として成長していくプロセス等を学ぶ。受講を通じて、生涯にわたる学習への動機づけや意欲を高め、公認心理師資格を取得し、実務を行っていくために役立つ道標の一つとしてもらいたい。	岩壁 茂(立命館大学、教授)	◎	60分
		Ⅱ					
		Ⅲ					
		Ⅳ					
		Ⅴ	○				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅱ 人間理解の基礎を学ぶ[身体とこころ/発達と成長] 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-2-1	いのちの誕生	I	○	人が胎内に宿り、誕生し、育つことについて、最新の周産期医療における心理的課題を通して考えるとともに、生まれてきた赤ちゃんと家族が出会い、その関係の中で育っていく過程について理解を深める。	永田 雅子(名古屋大学、教授)	◎	54分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					
C-2-2	脳とこころの発達	I		近年、脳や心の初期発達の重要性が指摘されている。脳や心の初期発達の最新知見について学ぶ。また、子どもの脳の負の条件や状況からの回復力、成長力についての知見も得る。	黒田 公美(東京工業大学 生命理工学院、教授)	◎	58分
		II	○				
		III					
		IV					
		V					
C-2-3	人間のライフ・サイクルと心理社会的成長	I		人間は他者との関係性の中で成長していく。養育者との愛着関係の形成についての総合的な知見が得られるようにする。また、集団の成長促進的要因など、社会的な人間関係の中でのポジティブな側面について理解し、支援に役立てられるようにする。	遠藤 利彦(東京大学、教授)	◎	105分
		II	○				
		III					
		IV					
		V					
C-2-4	老いと死	I		老人介護施設における老いとホスピスにおける死生観を学び、人生の終末について考察する。在宅医療における終末期の臨床について理解する。	神田橋 宏治(としま昭和病院、医師)	◎	59分
		II	○				
		III					
		IV					
		V					
C-2-5	身体とこころ	I		身体とこころとは相互に関わりあうことについて理解を深める。こころが身体に影響を及ぼす側面だけではなく、身体がこころに影響を及ぼす側面にも注目する。イントロダクションとして、心身相関を理解することの重要性を指摘する理論(例えば、マインドフルネスやボリヴェーガル理論)を紹介し、さらに臨床現場における実例を用いながら、精神医療及び精神神経学のエキスパートとともに、より実践的に学ぶ。	黒木 俊秀(九州大学、教授) 熊野 宏昭(早稲田大学、教授) 兼本 浩祐(愛知医科大学、教授)	○	82分
		II					
		III	○				
		IV	○				
		V					

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅱ つづき 人間理解の基礎を学ぶ[身体とこころ/発達と成長]【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-2-6	こころの病とこころの健康を考える	I		「こころの健康と病の境界線とは？」「何のための、誰のための見立てか？」という基本問題を考えることを通じて、精神疾患の診断をめぐる問題や、診断やアセスメントの効用と限界を理解する。発達障害をめぐる多元的アセスメントについて学ぶ。	黒木 俊秀(九州大学、教授) 山下 洋(九州大学病院、特任准教授) 杉山 登志郎(福井大学、客員教授)	△	74分 46分
		II					
		III	○				
		IV	○				
		V					
C-2-7	人間の理解、人間存在の理解	I		こころとは、いのちとは、魂とは、また生きるとは、信じることは、について問うことを通じて、人間の理解、人間存在の理解の基本となる考え方について学ぶ。それを通して、一人ひとりの思いや願い、人生や生活状況を理解する視座を得る。	神庭 重信(九州大学、名誉教授) 島園 進(東京大学、名誉教授)	△	68分
		II					
		III	○				
		IV	○				
		V					
C-2-8	心理的支援の現場における実践的なアセスメント	I		アセスメントの要諦は、要支援者やその関係者に対する支援方針や支援計画の立案に資すること、要支援者の自己理解を促進することである。前者に対応する「アセスメントの内容」(BFSモデル、生態学的アセスメント)と、後者に対応する「検査結果やアセスメントの結果についてのフィードバック」の在り方について学ぶことを通じて、アセスメントと支援の一体性に基づく全人格的・包括的アセスメントについての視点を得る。	熊上 崇(和光大学、教授) 橋本 忠行(香川大学、教授)	○	105分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					
C-2-9	公認心理師としての自己理解と職能的発達	I		多職種での支援では、多職種チームで協働してアセスメントすることが求められる。その際に必要な公認心理師自らの価値観や実践能力、要支援者からの自分への評価等といった自己理解とその背景となる自己を取り巻く文化の理解の重要性について学ぶ。	岩壁 茂(立命館大学、教授)	◎	57分
		II					
		III	○				
		IV					
		V	○				
C-2-10	ストレスへの向き合い方とその対処	I	○	心理支援の現場では、被支援者のみならず、支援者も、さまざまなストレス状況に置かれる。ストレスの理解やその向き合い方について、マインドフルネスの考え方を取り入れた実践例等をとおして具体的に学ぶ。本研修では、ストレスとは何か、ストレス反応はどのように生じるのかといった、ストレスに関する基礎的な知識を学ぶ。また、ストレスにさらされたときの当事者の認知や習慣などの個人要因に着目し、ストレスに対する抵抗力をより高めるための方法について学ぶ。さらに、リラクセーション、マインドフルネスの具体的な手続について、研修講師の解説・案内のもと、より実践的に学ぶ。	熊野 宏昭(早稲田大学、教授)	◎	63分
		II					
		III					
		IV	○				
		V					

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅲ さまざまな視点からこころを考える【9講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-3-1	現代社会とキャリア	I	国や地域の文化・社会や経済のシステムによって、個人の労働観・キャリア観は様々な形で展開されてきた。人のキャリアをどのように考え、いかにその支援をしていくのか。過去から現在、将来に向けたキャリア形成とキャリア支援のあり方について、現代社会の特徴とともに考える。	下村 英雄(独立行政法人労働政策研究・研修機構 職業構造・職業指導部門、副統括研究員)	◎	64分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-3-2	社会集団・組織と心身の健康	I	集団や組織が個々の成員に及ぼす功罪両面の影響特性と、集団や組織自体が危機的状況を招いてしまう潜在的なリスクの心理学的特徴について理解する。そして、将来にわたって持続可能性が高く、成員が安全に健康に活動していくことのできる組織を作っていくために重要な鍵を握る取り組みについて考える。	山口 裕幸(九州大学、教授)	◎	61分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-3-3	家族	I	日本における家族形態や家族機能の歴史的な変遷、さらには地域社会の時代的変動や地域格差について俯瞰し、現代の家族や地域社会が抱える課題を理解する。さらに人の生命や発達において家族・地域・社会が果たしている役割と、家族や地域の今日的課題が養育環境や子どもの発達に与えている影響等を理解する。	神谷 哲司(東北大学、教授)	◎	60分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-3-4	生活の営みとこころ	I	社会的養護を必要として児童福祉施設に入所する子どもたちは、家庭での基本的な生活が立ち行かず、安全で安心な日常からかけ離れた暮らしを余儀なくされてきた子どもが少なくない。こうした子どもたちが入所後、安心できる暮らしを取り戻し、信頼できる大人との関係性を育み、心理的に回復するためには、日々の生活の場を通じた関わりが極めて重要となる。食事、入浴、睡眠等の日常生活の営みが子どもの成長と発達にもたらす意味を理解し、安全で安心な暮らしを子どもと共に作り上げていく実践について理解する。併せて、家族の病気、災害、離別など家族の重大な変化や出来事(イベント)が子どもたちにもたらす影響についても考えていく。	増沢 高(子どもの虹情報研修センター、研究部長) 松永 忠(社会福祉法人別府光の園、統括施設長) 国分 美希(社会福祉法人至誠学舎立川 至誠大空の家、施設長)	□	73分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-3-5	家族像とアイデンティティ	I	人はそれまでの家族との暮らしをもとに家族像が形成される。家族の形態が多様化する現代、その像は多様化している。またそれまでの生活歴によって、肯定的な家族像を描く子どももいれば、否定的な家族像を抱えている子ども、さらには家族像が描けない子どももいる。家族像は、自身のアイデンティティを形成する上で大きな意味を持ち、深い実存のテーマとも関係する。心理的支援において、当事者理解の重要な一部であることを理解し、実践においてこのテーマをどのように扱うべきかを考える。	神谷 哲司(東北大学、教授) 松永 忠(社会福祉法人別府光の園、統括施設長) 国分 美希(社会福祉法人至誠学舎立川 至誠大空の家、施設長)	□	55分
		II				
		III				
		IV				
		V				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅲつづき さまざまな視点からこころを考える【9講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-3-6	文化における普遍性と多様性	I	○	文化は、人間のこころに多大な影響を与えており、文化を重要なものとして捉える視点を学ぶ。また、生活文化(暮らしと養育)の普遍性と社会や時代と共に変容する文化の多様性について、進化心理学的視点、社会心理学的視点、文化人類学的視点から理解し、現在の課題について洞察する。	長谷川 真理子(総合研究大学院大学、前学長) 外山 みどり(学習院大学、名誉教授) 波平 恵美子(お茶の水女子大学、名誉教授)	○	37分 35分 35分
		II	○				
		III					
		IV					
		V					
C-3-7	心理的支援の実践における文化	I		病やその治療に関わる問題には、当事者の生活文化的な背景や支援が行われる場にある風土や文化、その地域のローカルな支援の有り様と大きく関わりがある。また、現在広く知られる各心理療法等にも時代性や社会文化的背景が大きく関わっており、心理職はこうした視点を意識する必要がある。当事者のニーズに即した心理的支援を提供するために、当事者を取り巻くさまざまな文化的視点を学び、これらを統合して理解していくための基本を知る。	江口 重幸(東京武蔵野病院、名誉副院長)	◎	62分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					
C-3-8	マイノリティの文化と心理的支援	I	○	マイノリティの文化的背景(貧困、障がい、性、外国人労働者、ヤングケアラー、社会的養護、その他)の諸相について理解する。マイノリティの人々がマジョリティの文化の中で、生きにくさ、暮らしづらさ、そして社会的不利益を理解する。心理的支援を実践する者として自身の中にある、マイノリティの文化への偏見や差別感情がもたらす心理的支援への影響を自覚する。	加賀美 常美代(目白大学、教授) 熊谷 晋一郎(東京大学、准教授) 葛西 真知子(鳴門教育大学、教授)	○	45分 38分 21分
		II	○				
		III					
		IV					
		V	○				
C-3-9	文化間移動のこころへの影響	I	○	移民や出稼ぎ者、また海外では紛争など、やむなく故郷を去らねばならない人とその家族に焦点を当て、その方々の葛藤や喪失、そしてアイデンティティへの影響について考える。加えて、国内外における政府の移民政策やその課題についての理解を深める。	徳永 智子(筑波大学、准教授)	◎	68分
		II	○				
		III					
		IV					
		V	○				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅳ アセスメントと心理的支援の基本となる学びを深める【11講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-4-1	人々の暮らしを支える礎となるもの一法と医療の視点からー	I	法は社会を形作る基盤であり、人々の社会生活のありように大きく関わっていると同時に、個人の生活において人々の考え方、暮らし方にも極めて大きな影響を与えている。具体例により、法が社会を形作る根幹に関わる重要な役割を持つことを知る。また、個々人のライフステージにおけるあらゆる局面で医療者は人間の苦しみの一つである病や疾患というものに深く関わり、それを通して人々の生に触れている。医療現場における事例に触れ、一人ひとりの生について考える。	安倍 嘉人(元東京高等裁判所、長官) 神庭 重信(九州大学、名誉教授) 村瀬 嘉代子(公認心理師試験研修センター、顧問 大正大学、名誉・客員教授)	△	67分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-4-2	心理専門家の責任とクライアントの責任	I	心理的な支援は一方的に行われるものではない。心理的支援の多くは、クライアントと心理専門職による相互的な営みであり、相互作用によって成り立つものであることから、心理専門職のみならずクライアント自身にも双方に責任が生じる。それぞれに有する責任とはどのようなものであろうか。その責任の在り方について考える。	森田 美弥子(名古屋大学、名誉教授)	◎	58分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-4-3	障害と罪の有責性を考える	I	障害に起因して罪を犯した場合に、法に基づき障害を理由として免責されることがある。こうした判断は加害者を保護するための措置である一方で、加害者本人の尊厳や自尊心を損なうという一面もある。さらには、加害者となった人の中には、もともとは被害者であった場合も少なくない。こうした問題には、クライアント自身の自尊心や尊厳、被害者が抱く複雑な心情などさまざまな側面も関わっている。犯した罪について、加害者自身の責任について考える。	安保 千秋(都大路法律事務所、弁護士)	◎	63分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-4-4	事実への接近	I	事実への接近は極めて重要であり、臨床実践に必須のものである。事実を包括的に収集し、多面的、多角的に考察する視点を得る上では、事実の収集と考察のプロセスにおいて、要支援者と支援者の主観と観察可能な客観の視点から、事実をメタ認知する視点も重要である。また事実に接近する過程においては必ず倫理という課題に直面する。事実に接近しようとするあまり、クライアントへの配慮に欠けた支援をしたり、クライアントや支援者を傷つけたりすることもある。こうした事実への接近に関わる側面についても考えてみたい。	金矢 拓(四季の風総合法律事務所城南オフィス、弁護士)	◎	60分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-4-5	さまざまな分野における事実の取り扱い	I	5分野における事実についての考え方やその取り扱い方は様々である。そこには共通性も多いが、各分野に特有の特徴もみられるであろう。各分野において重要だとされるポイントを明らかにし、それらを理解した上で、心理専門職が扱う事実とはどのようなものであるのかについて考えを深める。	神庭 重信(九州大学、名誉教授) 黒木 俊秀(九州大学、教授) 増沢 高(子どもの虹情報研修センター、研究部長) 石隈 利紀(東京成徳大学、教授) 橋本 和明(国際医療福祉大学、教授) 金井 篤子(名古屋大学、教授)	□	67分
		II				
		III				
		IV				
		V				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅳつづき アセスメントと心理的支援の基本となる学びを深める【11講義】

研修講義設定の観点	講義形式
Ⅰ 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
Ⅱ 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
Ⅲ 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
Ⅳ 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
Ⅴ 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-4-6	心理的支援の実践と研究成果:科学的根拠	Ⅰ	心理的支援の実践に対して科学的根拠を与える研究成果の往還に関する視点について学ぶ。「エビデンスに基づく実践」と「実践に基づくエビデンス」の二つの往還や視点について理解する。また、心理的支援の実践を通してエビデンスを得る方法(事例研究、内省的実践、スーパービジョン)などについて理解する。	岩壁 茂(立命館大学、教授)	◎	58分
		Ⅱ				
		Ⅲ				
		Ⅳ				
		Ⅴ				
C-4-7	日々の実践を振り返る	Ⅰ	内省的実践の基礎として、日々の実践をどのように振り返るべきかについて考える。具体的には、①人間の判断力には限界があることを自覚すること、②自身の見立てに誤りがないか、常に批判的に振り返る姿勢を身につけること、③実践を反芻、反省する機会としての記録、説明、話し合いの重要性を知ること、などがあげられる。また、自分の実践に対する自己評価の在り方がその後の一人ひとりの成長に大きく関わる。どのように自分の実践を振り返れば良いのか、過剰な内省とほどよい内省を考える。	増沢 高(子どもの虹情報研修センター、研究部長)	◎	53分
		Ⅱ				
		Ⅲ				
		Ⅳ				
		Ⅴ				
C-4-8	スーパービジョンにおける学び方	Ⅰ	SV(スーパービジョン)は内省的な実践を支える一つの大切な要素である。SVを通してどのように学べば良いのか、スーパーバイザー、スーパーバイジーはどのような在り方が求められるのかについて考える。 ① SVの意義と目的:信頼関係を基盤としてのスーパーバイズ ② SVの方法:内部SVと外部SV、SVで扱う内容、SVの形態(個人、グループ)、SVの方法(同行活動、随時、定期)	橋本 和明(国際医療福祉大学、教授) 谷 麻衣子(愛知県医療療育総合センター中央病院、主任) 鈴木 隆文(児童心理治療施設名古屋市くすのき学園、心理士) 今枝 美幸(金城学院大学、助教) 近藤 隆夫(帝塚山大学、教授・元家裁調査官) 水島 秀聡(小島プレス工業株式会社、課長)	□	62分
		Ⅱ				
		Ⅲ				
		Ⅳ				
		Ⅴ				
C-4-9	ケースカンファレンスにおける学び方	Ⅰ	ケースカンファレンスは内省的な実践を支える一つの大切な要素である。ケースカンファレンスを通してどのように学べば良いのかについて以下のテーマを考える。 ① ケースカンファレンスの意義:よりの確なアセスメント、チーム支援におけるアセスメントと方針の共有、ケースからの学び、支援に伴う迷いや困難の共有 ② ケースカンファレンスの展開:経過等の情報の確認と共有、ケース理解の検討(課題と強みの整理)、支援方針の設定と実行可能な取り組みと役割分担の明確化	川瀬 正裕(金城学院大学、教授)	◎	65分
		Ⅱ				
		Ⅲ				
		Ⅳ				
		Ⅴ				
C-4-10	心理検査基礎編(理論)	Ⅰ	心理検査の正しい知識を持ち、心理検査を適切に実施することは、心理職の重要な業務の一つである。心理検査の基本的な知識、面接、観察による的確な情報収集と報告書作成の要点を学ぶ。本研修は、心理検査基礎編として、理論に焦点を当て、心理的アセスメントの定義、背景や方法に加え、心理検査結果の解釈、報告書作成、フィードバックのポイントなど、アセスメントの基本的要素を丁寧に概説する。	橋本 忠行(香川大学、教授)	◎	80分
		Ⅱ				
		Ⅲ				
		Ⅳ				
		Ⅴ				
C-4-11	心理検査基礎編(実践)	Ⅰ	C-4-1の理論編の後半にあたる本研修では、支援の実践に役立てることを意識し、架空事例を用いた具体的な報告書作成例を基に解説する。心理検査を学び始めた初学者、これから実務に就く方や実務の現場で心理検査を実施している心理職者にとっても、学び直しや新たな気づきの機会を提供されるであろう。	橋本 忠行(香川大学、教授)	◎	60分
		Ⅱ				
		Ⅲ				
		Ⅳ				
		Ⅴ				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅴ ケアや支援を要する人々への理解を深める
 [専門職として、病いや障害、厳しい現実を理解する] 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-5-1	病気・障害とこころ	I		本単元では、障害学の総論として、①障害の個人モデルと社会モデル、②国際生活機能分類に基づく理解と支援、③障害児・者に対する法制度の現状と課題、④障害のある人々の自己実現と社会参加の在り方等について学ぶ。	黒木 俊秀(九州大学、教授)	◎	45分
		II	○				
		III	○				
		IV					
		V					
C-5-2	重い病気の子ども：障害とこころ	I		悪性新生物、腎臓病、心臓病、糖尿病等に罹患する小児は、学校教育法上は「病弱者」と呼ばれ、特別支援学校のほか、医療機関内に設置された院内学級や訪問学級等において教育を受けているが、彼らはしばしば深刻な心理的危機に直面しやすい。本単元では、病弱児とその家族が抱える心理社会的問題とその対応について学ぶ。	藤野 陽生(大阪大学、准教授)	◎	69分
		II					
		III	○				
		IV	○				
		V					
C-5-3	神経発達症・障害とこころ	I		今日、発達障害の理解と支援は、5分野に共通する喫緊の課題である。本単元では、発達障害(神経発達症)の概念と基本的なアセスメント、及び支援に寄与する基本的な理論と技法等について学ぶ。	井上 雅彦(鳥取大学、教授) 黒田 美保(田園調布学園大学、教授)	○	48分 51分
		II					
		III	○				
		IV	○				
		V					
C-5-4	医療化／心理化とメンタルヘルスケアの社会化	I	○	現代社会における心理化(医療化)の功罪について考える。医療人類学から考える心理化の功罪、社会と心理学の関係について:「こころの健康と病の境界線とは?」「何のための、誰のための見立てか?」という基本問題を考える。	石原 孝二(東京大学、教授)	◎	78分
		II	○				
		III					
		IV					
		V					
C-5-5	こころの病とこころの薬	I		今日では、人々が経験するさまざまな悲哀や苦悩の医療化が進み、幼児から高齢者に至るまで医療機関において薬物療法の対象となる傾向にある。心理的支援にたずさわる公認心理師にも薬物療法には関心を抱いてほしい。向精神薬の種類と適応、その効用と限界について学び、薬物療法による支援との協働について考える。	黒木 俊秀(九州大学、教授)	◎	55分
		II					
		III	○				
		IV	○				
		V					

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅴつづき ケアや支援を要する人々への理解を深める
 [専門職として、病いや障害、厳しい現実を理解する]【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-5-6	インフォームド・コンセントと協働による意志決定	I	クライアントと関係を構築しながら、情報共有と協働での支援方針の検討および協働の意思決定のプロセスについて学ぶ。また、クライアントを含むチームでの情報共有(支援の説明、支援経過のフィードバックなど)とインフォームド・コンセントや協働の意思決定についても学ぶ。	田中 康雄(こころとそだちのクリニックむすびめ、医師)	◎	60分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-5-7	生命と存在に関わる真実告知	I	生命にかかわる事実、実存に関する事実(出自、人生史)などクライアントにとって大切な事実・真実の告知の視点について学ぶ。また、公認心理師が心理専門職として、クライアントが自分にとって大切なことについて伝えることや医師の診断告知プロセスで果たす役割について理解する。加えて、事実の重み付けにどのようなことがあるのか(余命宣告、出自、人種、死別、離別、家族の悲劇や犯罪歴等)についても、具体的事例を通して学ぶ。	久保田 馨(日本医科大学、教授) 柘植 あづみ(明治学院大学、副学長・教授) 山田 勝美(山梨県立大学、教授)	○	40分 80分 46分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-5-8	認知症の理解と支援	I	認知症の生物学的課題、認知症の医学診断、医療現場における認知症の現状と課題について学ぶ。さらに、認知症に係る高齢者の現状と生活的課題、高齢者福祉に関する法制度、ライフサイクルにおける高齢者の心理社会的課題についても理解する。さらに、我が国の超高齢社会の現況と課題及び介護福祉制度について考える。	繁田 雅弘(東京慈恵医科大学、主任教授)	◎	50分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-5-9	高齢者・その支援者を共に支える	I	我が国における高齢者介護の現状と課題、高齢者を支える地域の現状と課題、認知症高齢者への心理的支援について理解する。また、認知症が疑われる被支援者とその家族に対する心理的支援について、事例を用いて学ぶ。	繁田 雅弘(東京慈恵医科大学、主任教授)	◎	52分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-5-10	発達障害(神経発達症)の理解とその支援	I	現在、さまざまな現場において、神経発達症(発達障害)の理解とその支援が求められている。本研修では、神経発達症(発達障害)の概念の成立や変遷過程、障害の併存やその問題点などについて概説する。後半では、自閉スペクトラム症の幼児へのアセスメントと支援に焦点を当てて、具体的かつ実践的な内容を、画像や映像を用いながら分かりやすく解説している。神経発達症(発達障害)のある方への支援の基本的な考え方が理解できる内容であり、今後の実践に重要な示唆を与える内容であろう。	黒田 美保(田園調布学園大学、教授)	◎	64分
		II				
		III				
		IV				
		V				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群VI 現代社会の諸問題の理解を深め、支援を考える 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-6-1	危機への理解と支援	I	危機のアセスメントの視点・方法(個人レベル、家族レベル、組織レベル、地域コミュニティレベル、地球レベル)、リスクマネジメントとクライシスマネジメントの視点・方法について学ぶ。また、企業における危機対応としての、ポストベンションについて考える。	窪田 由紀(九州産業大学、科研費特任研究員)	◎	58分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-6-2	危機対応におけるコミュニケーション	I	危機対応におけるコミュニケーションを理解する。具体的には、組織内コミュニケーション、多職種連携におけるコミュニケーション、リスクコミュニケーションの視点・方法および危機対応におけるメンバーや自分自身の心理的状況や行動を振り返る視点・方法について学ぶ。また、支援することは与えることばかりでなく、さりげなく分かち合うことにも喜びがあること、またそこからの学びも多いことも知る。	平井 啓(大阪大学、准教授)	◎	59分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-6-3	災害における危機対応	I	東日本大震災、阪神淡路大震災等における、危機対応における公認心理師の実践例を通して、災害時において、問題発生状況を理解し、支援活動を行うために必要な視点(現地や現場への尊重等)と具体的方法について考える。	河 嶋 譲(厚生労働省委託事業DPAT事務局次長、医師) 大澤 智子(兵庫県こころのケアセンター、上席研究主幹)	○	38分 38分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-6-4	貧困の理解	I	我が国における貧困と孤立の現状と課題、貧困と孤立がもたらす社会的不利、貧困と孤立の社会的背景、貧困と孤立への対策の現状と課題について理解する。	松本 伊智朗(北海道大学、名誉教授)	◎	92分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-6-5	不登校と社会的ひきこもり	I	社会的ひきこもりの現状と課題、不登校(在宅での長期欠席)の現状と課題、社会的ひきこもりの背景、社会的ひきこもり対策の現状と課題について理解する。	伊藤 美奈子(奈良女子大学、教授) 斎藤 環(筑波大学、教授)	○	40分 46分
		II				
		III				
		IV				
		V				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群VIつづき 現代社会の諸問題の理解を深め、支援を考える 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-6-6	自傷について	I		過去に自傷の経験がある者のほとんどが、病院の受診をしていない。また、その一部は自殺企図の経験が認められている。思春期・青年期の人々の自傷は、把握することが難しく、調査研究も十分に行われていない。ここでは、思春期・青年期の人々の自傷の理解と支援について考える。	松本 俊彦(国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所、薬物依存研究部部長 (兼任)薬物依存症センター、センター長)	◎	61分
		II					
		III					
		IV	○				
		V	○				
C-6-7	自殺(自死)について	I		昨今、高齢者による自殺が表面化する一方で、児童や青年の自殺が2020年以降、統計上の記録を毎年更新するような深刻な事態となっている。ここでは、児童・青年の自殺(自死)の背景とその多面的な理解をするとともに、それらの事例に対する心理的介入と一次予防の検討も行う。	新井 肇(関西外国語大学、教授)	◎	57分
		II					
		III					
		IV	○				
		V	○				
C-6-8	暴力や加害の背景にあるもの	I		暴力や加害の背景にあるものを理解する。ここでは、①攻撃衝動・性衝動と衝動制御(自律性、共感性、規範意識など)、②暴力と加害の背景にある感情(怒り、恨み、恐怖、不安、劣等感)、認識(支配被支配性の対人認識)、価値観(暴力への親和性、暴力の必要性など)、③暴力と加害の対象(特定、不特定)、目的、手段(直接、間接(器物)、インターネット)、④インフォーマルな関係(対人距離の近さ)と感情(衝動)の行動化、⑤背景(孤立、貧困、被虐待体験、その他)について学ぶ。	藤岡 淳子(大阪大学、名誉教授)	◎	56分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					
C-6-9	虐待、DV、いじめ、ハラスメント ー弱者への暴力を考えるー	I		虐待、DV、いじめ、ハラスメントの問題を通して、弱者への暴力について考える。ここでは、児童虐待・高齢者虐待・障がい者虐待・家庭内暴力・いじめ・ハラスメントの現状と課題、それらの背景にある支配と被支配性、さらに、虐待にいたる様々な背景について理解する。	中村 正(立命館大学、教授)	◎	75分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					
C-6-10	暴力の世代間伝達	I		暴力の世代伝達の理解は非常に重要であり、目の前のクライアントだけをみていたのではケースの理解はおぼつかない。そこには家族全体の力動、世代間を超えた連鎖などの視点が必要である。世代間連鎖に向かう要件(孤立、二次的問題、生活困窮など)と連鎖を防ぐ要件(信頼できる支援者・友人、支援を受けること、子どもの力(好きなこと、居場所)、親子の情緒的つながりなど)を理解する。	野坂 祐子(大阪大学、教授)	◎	58分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅶ 保健医療分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-7-1	我が国の保健医療制度の現状と課題	I	○	日本の保健医療制度の仕組みと公認心理師の立ち位置を理解する。わが国は、世界にも類を見ない国民皆保険制度を60年以上にわたって発展させてきたが、超高齢社会を迎え、高騰する総医療費の負担が大きな国家的課題となっている。そのような限りある状況において、公認心理師に新たに求められるものは何かを考える。	吉川 隆博(東海大学、教授)	◎	48分
		II	○				
		III	○				
		IV					
		V					
C-7-2	チーム医療とリーダーシップ	I	○	医療観察法制度のなかでは、公認心理師もチーム医療の一員に位置づけられる。チーム医療における公認心理師の役割は心理アセスメントや個人心理療法だけでなく、コーディネートやケースマネジメントも含まれる。本単元では、心理学の知識と技能を生かし、円滑なチーム医療の遂行に寄与するための公認心理師の活動を学ぶ。	畠山 卓也(高知県立大学、准教授) 古村 健(名古屋市立大学大学院、准教授)	○	46分 53分
		II	○				
		III	○				
		IV					
		V					
C-7-3	一般身体科領域における公認心理師への期待	I		小児科(小児がん)、産婦人科(生殖医療)、外科(移植医療)救急医療(ICU)、災害医療等、一般身体科領域における心理アセスメントと支援に対する新しいニーズ(患者家族への支援を含む)について考える。特に、緩和ケアにかかわる身体科領域における公認心理師への期待と役割を概説する。	服巻 豊(広島大学、教授)	◎	100分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V					
C-7-4	生活習慣と未病状態への支援	I		今日、肥満や糖尿病、高血圧症、貧血等々、生活習慣に起因する様々な病態は、疾病化するよりも以前の未病状態(subclinical conditions)が長期間潜在することが指摘されており、その早期発見と早期介入の意義と方法論が提言されている。この問題は、被支援者のwell-beingとも深く関連することから、公認心理師としてどのような支援が可能かを検討する。	神田橋 宏治(としま昭和病院、医師) 竹中 晃二(早稲田大学、名誉教授)	△	64分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V	○				
C-7-5	保健医療分野におけるトラウマインフォームドケア	I		現在、さまざまな領域で注目されるトラウマインフォームドケア(TIC)の視点から、特に精神科医療における隔離拘束・身体拘束等のあり方を見直してみることの意義は大きい。また、最近の診療報酬改定における退院後支援相談員、あるいはPTSDに対する公認心理師加算等にも触れ、公認心理師が医療領域において念頭に置くべきTICの概念を理解する。	大岡 由佳(武庫川女子大学、准教授)	◎	64分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V	○				

講義群Ⅶつづき 保健医療分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-7-6	精神科急性期病棟における多職種連携	I		精神科急性期病棟における治療をモデルに、多職種間のみならず、患者・家族への情報提供・共有のあり方、さらに近年普及しつつある臨床的・パスの有用性を理解し、改めて公認心理師に求められる情報共有のあり方を考える。(講義と対談)	三井 督子(京都大学大学院医学研究科 助教) 草地 仁史(日本精神科看護協会 業務執行理事) 黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授)	○	57分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V	○				
C-7-7	リスクアセスメントとクライシスプラン	I	○	チーム医療の現場では、多様な価値判断のなかでさまざまな葛藤が生じうる。たとえば、重大な他害行為を行った精神障害者の処遇拡大を判断する際には、適切なリスクアセスメントとケースフォーミュレーションに基づき、ケースマネジメントがなされる必要がある。本単元では、幻覚妄想の影響下で重大な他害行為を行った統合失調症患者に対する心理支援の事例を通して、公認心理師の専門性を生かした活動を多面的に学ぶ。(講義と対談)	古村 健(名古屋市立大学大学院、准教授) 野村 照幸(新潟医療福祉大学、教授) 黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授)	○	42分 24分 23分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V	○				
C-7-8	地域在宅医療における公認心理師への期待	I		今日、小児科や精神科領域のみならず、すべての医療現場において虐待を疑われる事例に遭遇する機会が増えており、しばしば公認心理師も対応を依頼される。ここでは、小児救急の現場における事例を通して、虐待の早期発見と早期介入におけるトラウマインフォームドケア(TIC)の視点の意義、そして医療従事者が適切な対応を行なった後の経過から心理支援のあり方を考える。(講義と対談)	若林 英樹(三重大大学、教授) 神田橋 宏治(としま昭和病院 医師) 黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授)	○	85分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V	○				
C-7-9	医療従事者の虐待対応とその後—TICの視点から	I		今日、小児科や精神科領域のみならず、すべての医療現場において虐待を疑われる事例に遭遇する機会が増えており、しばしば公認心理師も対応を依頼される。ここでは、小児救急の現場における事例を通して、虐待の早期発見と早期介入におけるトラウマインフォームドケア(TIC)の視点の意義、そして医療従事者が適切な対応を行なった後の経過から心理支援のあり方を考える。(講義と対談)	毎原 敏郎(兵庫県立尼崎総合医療センター、医師) 大岡 由佳((武庫川女子大学 准教授) 黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授)	○	85分 21分 23分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V	○				
C-7-10	こころとからだの境界域：慢性一次性疼痛の臨床	I		「痛み」は、古来より医療を求める人々の最大の主訴であるが、2020年、国際疼痛学会は、それを「実際の組織損傷もしくは組織損傷が起こりうる状態に付随する、あるいはそれに似た、感覚かつ情動的不快な体験」と再定義した。これに対応して、ICD-11にも新たに「慢性一次性疼痛」のカテゴリーが登場した。ここでは、最新の「痛み」の理解に基づき、特に発達特性やトラウマが複雑に絡む慢性疼痛事例に対する支援について考える。(講義と対談)	黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授) 杉山 登志郎(福井大学、客員教授)	○	80分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V	○				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅷ 福祉分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-8-1	生活と心理臨床	I	当事者の生活(暮らし)全般に目を向け、生活の様々な場面からの情報把握とそれらを踏まえた当事者理解、および生活場面も視野に入れた心理臨床の展開について理解する。	滝川 一廣(あなはクリニック、医師)	◎	62分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-8-2	福祉領域における権利擁護と法制度	I	【児童福祉】 子どもの権利条約、こども基本法とこども大綱、児童福祉法、児童虐待防止法、DV防止法、子ども・子育て支援法、子どもの貧困対策の推進に関する法律、養子縁組あっせん法、その他 【障害福祉】 障害者権利条約、障害者総合支援法、発達障害者支援法、障害者虐待防止法、障害者差別解消法 【高齢者福祉】 老人福祉法、介護保険法、高齢者虐待防止法、認知症基本法	高橋 温(新横浜法律事務所、弁護士) 丹野 傑史(長野大学、教授) 加藤 伸司(東北福祉大学、教授)	○	31分 31分 42分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-8-3	多職種協働による支援と心理職の役割	I	【児童福祉】 児童福祉を担う機関と職種についての理解。多職種からみた心理職像と求められる役割について理解し、有効な多職種連携を検討する。 【障害福祉】 障害福祉を担う機関と職種についての理解。多職種からみた心理職像と求められる役割について理解し、有効な多職種連携を検討する。 【高齢者福祉】 高齢者福祉を担う機関における多職種の理解を深める。認知症初期集中支援チームや養護者支援における高齢者福祉の現状を理解し、今後心理職に求められる役割について考え、有効な多職種連携を検討する。	薬師寺 真(倉敷児童相談所、所長) 下山 真衣(信州大学、准教授) 加藤 伸司(東北福祉大学、教授)	○	43分 30分 35分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-8-4	子育て支援と心理職の役割	I	子育てに関する心理教育、家族からの子育て相談、乳幼児健康診断、保育所等における子どもの相談等、一般の子育て支援の実際と、そこでの心理師の役割について実践事例を踏まえて理解する。	八木 安理子(同志社大学、客員教授)	◎	33分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-8-5	障害のある当事者、家族、支援者への支援と心理職の役割	I	障害のある児・者に対する支援、家族への支援、子どもと家族を支援する方々への支援等の実際と、そこにおける心理師の役割について実践事例を踏まえて理解する。	田熊 立(千葉県発達障害者支援センターCAS、副所長)	◎	40分
		II				
		III				
		IV				
		V				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅷつづき 福祉分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-8-6	児童虐待対応の流れと心理職の役割	I	○	通告の受理、初期調査、リスクアセスメントと子どもの保護、包括的アセスメントと子どもと家族への支援、子どもと家族との関係性への支援といった展開における公認心理師の役割について、実践事例から学ぶ。	薬師寺 真(倉敷児童相談所、所長)	◎	45分
		II					
		III	○				
		IV					
		V					
C-8-7	社会的養護を必要とするこどもの支援と心理職の役割1: 小学校年齢児	I	○	児童福祉施設に入所した子どもは、それまでの不適切な養育環境等によって、重い心の課題を抱えている。生活での様々な場面を通した子どもの状態像の把握やそれまでの生育状況を踏まえた子ども理解等の包括的アセスメントによる支援の展開と心理師の役割について実践事例を通して理解を深める。	藤原 誠(子どもの虹情報研修センター、研修課長)	◎	66分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V	○				
C-8-8	社会的養護を必要とするこどもの支援と心理職の役割2: 思春期・青年期	I	○	虐待等による影響によるアタッチメントの問題やトラウマ等の問題から回復しても、自らの過酷な人生史を振り返り、深い悲しみと喪失感から自らを支えることさえ困難な状況に陥る場合が少なくない。特に思春期・青年期のアイデンティティ形成の時においては大きなテーマとなる。この段階を支える課程と心理師の役割について、実践例を踏まえて理解を深める。	増沢 高(子どもの虹情報研修センター、研究部長)	◎	57分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V	○				
C-8-9	高齢者支援における高齢者と家族に対する心理的支援の実践	I	○	高齢者の意思決定支援やアドバンスケアプランニング(人生会議)における心理師の役割について理解する。介護問題では、認知症の診断後の当事者と家族に対する初期支援や、虐待の未然防止にむけた家族に対する心理的支援など、多職種協働の中で、心理師が担うべき役割について実践例を踏まえて理解を深める。	加藤 伸司(東北福祉大学、教授)	◎	65分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V	○				
C-8-10	強度行動障害の理解と支援の実践	I	○	強度行動障害の子どもの理解と支援の実践について理解を深める。そこにおける心理師の役割について実践例を基に検討を深める。	高橋 潔(鉄道弘済会、理事)	◎	47分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V	○				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅸ 教育分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-9-1	教育の現状と動向	I	公認心理師として学校における「教育」という行為についての視点を持つ。スクールカウンセラーなどとして働く公認心理師にとって、「生徒指導」は活動の枠組みとなる。そのため児童生徒を取り巻く、生徒指導上の課題(いじめ、不登校、自殺、児童虐待、ヤングケアラーなど)について、実態、要因、行政の対策について紹介する。またスクールカウンセラーの現状、効果的な活用、今後の在り方について、共有する。そして2022年に改訂された『生徒指導提要』の骨子(積極的な生徒指導、重層的支援構造、チーム学校)について解説する。生徒指導の定義・目的が一人ひとりの子どものウェルビーイングの向上であり、公認心理師(心理支援の総合職)への期待について共有する。	仲村 健二(文部科学省児童生徒課生徒指導室、室長) 石隈 利紀(東京成徳大学、特任教授)	○	38分 35分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-9-2	学校組織とチーム学校の理解	I	公認心理師として働く組織・場所を知り、チーム学校・学校組織における自分の立ち位置の把握や実践の基礎を学習する。教育委員会と学校関係、学校のエデュケーションの共通言語となる学習指導要領や生徒指導提要の活用方法について解説する。チーム学校における心理教育的援助サービスのシステムを把握し、公認心理師への期待と課題を理解する視点を持つ。そして、教育における公認心理師としてのスクールカウンセラーの職務、基本となる活動、学校で働く時の基本姿勢、教職員との人間関係などについて共有する。さらに期待されている発達支援的な教育相談の取り組みについて紹介する。	山口 豊一(聖徳大学、教授) 石川 悦子(こども教育宝仙大学、教授)	○	42分 43分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-9-3	子どもの問題と心理教育的援助サービスのモデル	I	心理教育的援助をめぐる求められるアセスメントと援助サービスについて、予防の視点も交えてその考え方を学ぶ。はじめに、心理教育的援助の考え方を中心に講義を行う。学校現場で子どもの問題を解決するためには、個に対する的確なアセスメントを行い、生態学的な調査と支援資源の機能化が必要とされる。また、教師や学校・地域関係者と協働しながら、第1次～第3次の支援など、段階的に心理援助を進めていく必要がある。このことを分かりやすく講義する。次に、特別支援の事例を基に課題の提示と解説を行う。特別支援教育の本格実施以降、学校や地域で様々な実践が蓄積されている。ここでは包括的行動支援(PBS)モデルに準拠しながら、学校の実情に応じた課題解決法の検討を行う。	新井 雅(跡見学園女子大学、教授) 大石 幸二(立教大学、教授)	○	34分 49分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-9-4	家庭や地域の問題と心理教育的援助サービス	I	社会のなかでの学校における心理教育的援助サービスを考える。具体的には、虐待、貧困、非行、家族の方が抱える障害の問題、外国につながる場合など支援を要する家庭である。福祉の視点として学校の支援をどう引き出すのか、SSWなどの福祉専門家との連携が鍵となる。事例の背景の理解には、援助要請がしにくい状況の把握がポイントとなる。公認心理師が保護者をどのようにエンパワーできるのか、また、その視点をもとにした教師へのコンサルテーションもポイントになる。子どもの家庭・地域の現実の問題を理解して、公認心理師の援助サービスの在り方を学ぶ。後半は、公認心理師がスクールカウンセラーとして勤務する場面における援助事例をもとに、どのようにアセスメントし、学校の中で心理教育的援助サービスを展開していくのか解説する。虐待への対応、保護者支援についての具体的な視点を紹介する。	野田 正人(立命館大学、名誉教授) 水野 治久(大阪教育大学、教授)	○	36分 37分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-9-5	子ども、学校組織・風土・環境のアセスメント	I	学校では公認心理師はチーム学校の一員としての活動が求められる。支援の際にアセスメントが重要であることは言うまでもないが、チーム学校で求められるアセスメントについて理解する。はじめに、チームによるアセスメントや、チームに役立つアセスメントのあり方や方法について理解する。援助のために信頼関係を基盤に行われ、臨床的な情報と統計的な情報の統合を統合し、生態学的なアセスメントという特徴を持ち、学問的な基盤やエビデンスによって解釈される「賢いアセスメント」(intelligent testing)の考え方について理解する。次に、チーム学校での心理検査(主としてWISC-V、KABC-II)の実施結果(解釈)および報告について考える。	半田 一郎(子育てカウンセリング リソースポート) 小野 純平(法政大学、教授)	○	46分 27分
		II				
		III				
		IV				
		V				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群IXつづき 教育分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-9-6	教職員へのコンサルテーション・コーディネーション	I		教職員と連携・協働の実践を計画する力を確認し、養う。子ども・教職員や援助に関する情報の共有義務、報告義務と子ども・教職員との守秘義務について学ぶ。まず、教育現場におけるコンサルテーションの意義と目的(児童生徒にかかわる教師へのコンサルテーション・教師が行う保護者へのかかわりへのコンサルテーション)について学ぶ。次に学習面での学校組織や学級へのコンサルテーションと教職員との相互コンサルテーション(コンサルタント、コンサルティ)のタイミングや留意点などに焦点を当てて学ぶ。教職員のニーズと子どものニーズは必ずしも一致しないことへの理解を深める。	谷島 弘仁(文教大学、教授) 小野瀬 雅人(聖徳大学、教授) 小林 朋子(静岡大学、教授)	○	29分 44分 30分
		II					
		III	○				
		IV	○				
		V	○				
C-9-7	チーム学校へのコンサルテーション	I		チーム学校における心理教育的援助サービスの向上について計画し実践し振り返る視点を持つことを目指す。まずは、学校組織・システムレベルでのコンサルテーション、チーム援助のコーディネーションを行うための具体的なスキルの習得を目指す。あわせて、教職員を対象する校内研修の意義や方法について考える。次に、教育委員会や学校が掲げる教育目標を理解することの意味について考え、学校や教育委員会がどのような方針で学校経営をしているのかを視野に入れながら、チーム学校に対するコンサルテーション・コーディネーションを行う意義を理解する。ここでは、理論的な背景とともにSCがチーム学校に関わる事例をもとにして解説する。	家近 早苗(東京福祉大学、教授) 西山 久子(福岡教育大学、教授)	○	30分 30分
		II					
		III	○				
		IV	○				
		V	○				
C-9-8	保護者、地域との連携	I		学校において保護者は子育てにおいて援助を求める当事者であり、また子どもの援助を展開していく際のパートナーである。このような2つの面をもつ保護者との関係構築において大切な視点やその方法を学び、さらに地域資源との連携について学ぶ。当事者としての保護者理解として、はじめに、子育ての困難に保護者の傷つき体験が関係していることについて理解し、保護者への支援が子育ての支援に大きな意味をもつことを考える。次に子どもへの支援へのパートナーとしての保護者という面から、保護者と援助者との相互コンサルテーションにおける、カウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの把握の仕方や、保護者が援助のパートナーとなっていくプロセスについて理解する。保護者とのパートナーシップを中核にして、地域の援助資源も参加したネットワーク型援助チームによる連携の実践について学ぶ。	大河原 美以(大河原美以心理療法研究室) 田村 節子(元東京成徳大学、教授 スクールセーフティネット・リサーチセンター、代表理事)	○	40分 50分
		II	○				
		III	○				
		IV					
		V	○				
C-9-9	子ども(当事者)とのパートナーシップ	I		子どもを中心に置きながら、特定の状況の中で生きる子どもを理解し、パートナーシップに基づく取り組みを学ぶ。はじめに、コミュニティ心理学の考え方を基に講義を行う。子どもとのパートナーシップを築くことは、課題解決の出発点となる。子どもの生活現実や心理的体験に寄り添うために、信頼関係を基盤として関与しながら理解を深め、働き掛けを行うための手法について実践を通して分かりやすく講義する。次に、現代社会で子どもが直面する課題について事例を取り上げ、課題の提示と解説を行う。不登校や高校中退、いじめや児童虐待、ヤングケアラー、貧困、外国につながる子どもの、学校事故の影響など、個と集団の関係を踏まえ、コミュニティにおける子どもとのパートナーシップに基づく実践を検討する。	水野 治久(大阪教育大学・教授) 池田 美樹(桜美林大学・准教授) 小栗 貴弘(跡見学園女子大学・准教授)	○	40分 32分 35分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V	○				
C-9-10	教育分野における課題と公認心理師の役割	I	○	教育分野における公認心理師は、子どもに最も大きな影響を与える大人(保護者、教職員)を援助しながら、子どもが育つ環境の問題を解消し、環境を改善する役割を持つ。同時に、子どもに直接関わり、子どものパートナーとして、子どもの困りと悩みを理解して、共に問題の解消をめざす役割を持つ。この二重の役割を、教育行政の動向や学校組織の文化の文脈のなかで果たしていく視点と方法を持つことが求められる。現場での実践における今後の課題について考える。	石隈 利紀(東京成徳大学、教授) 家近 早苗(東京福祉大学、教授) 水野 治久(大阪教育大学、教授) 半田 一郎(子育てカウンセリング リソースポート) 大石 幸二(立教大学、教授)	□	101分
		II					
		III					
		IV					
		V	○				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅹ 司法・犯罪分野の実務における基本的課題 【11講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-10-1	司法における人間へのまなざし	I	○	どの分野でも共通することではあるが、心理職としての人間へのまなざしは業務をしていく上で何よりも大切な視点である。司法犯罪分野において、法を逸脱して罪を犯した人が対象者となる場合、関わる者として触法対象者に対する偏見や特別な意識を持ちやすい陥穽がある。しかしながら、一人の人間として尊重し、向き合っていく専門職としての基本姿勢こそが、対象者を更生させたり、立ち直らせていくことにも繋がる。こうした姿勢を基盤にもち職務にあたるのが大切であることを理解する。司法犯罪分野における人間観について、長年裁判官をしてきた講師の経験や考えを聞き、その後の研修課題において学んでもらいたい基本を理解する。	廣瀬 健二(元東京高等裁判所、判事) 橋本 和明(国際医療福祉大学、教授)	○	53分
		II					
		III					
		IV	○				
		V					
C-10-2	司法・犯罪関連施設における生活と関係性の治療的意味	I		刑務所・少年院・児童自立支援施設といった司法・犯罪関連施設について、冷たく厳しい施設だと、一般には思われているのではないだろうか。確かにそのようなハードな面がある一方で、施設における落ち着いた生活の営みや人としての温かな交流がなければ、対象者の変化は望めない。こうした施設においては心理的手法の導入以前から、生活そのものの持つ治療的意味、職員と対象者の関係性、治療共同体的な小集団の持つ意味が歴史的に重視されてきた。カウンセリングや精神療法などのように、必ずしも、「心」そのものを扱うのではない、施設におけるこうした営みや働きかけの大切さについて、公認心理師としてどう考えて関わるべきかを模索してみよう。	村瀬 嘉代子(公認心理師試験研修センター、顧問 大正大学、名誉・客員教授) 富田 拓(北海道家庭学校樹下庵診療所・ 網走刑務所医務課、医師)	△	27分 62分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					
C-10-3	司法・犯罪分野における特有の感情の理解	I		非常に強力とも言える法的枠組みを持ってしても、非行少年や犯罪者は関わりの当初、心理支援への自発的意欲が薄い場合が少なくない。そのために、心理職との対話においても、対象者は強い悪意や抵抗を示すような態度を向けたり、怒りや攻撃性を表現したり、他者を軽蔑、無視するといった方法で相手との関係を持つとすることもあつた。しばしば心理職に向けられるこうした感情への背景理解を深め、どのように当事者との関わりの中でそれに向き合っていけば良いのか。現在矯正領域等で仕事をする心理師の具体的な実践から、基本的な理解と対応における基本姿勢を学ぶ。	門本 泉(大正大学、教授)	○	69分
		II					
		III					
		IV	○				
		V	○				
C-10-4	公的支援と民間支援のシームレス連携	I		薬物依存や性犯罪、暴力行為等の支援においては、公的支援の他に民間支援(主として医療施設、自助グループ等)の活用が進んでいる。こうした官民の支援の仕組みや実際について話題を共有し、それを互いに念頭に置きながら要支援者に対する有効な支援をシームレスに行うことを試みる。触法対象者に対する公的支援、民間支援の実際や問題点を共有し、支援における自らの位置づけを俯瞰的に理解するとともに、支援技術の習得をねらう。保健医療分野、福祉分野、教育分野において触法対象者に対する問題性に対する支援の枠組みの理解と実践技術の習得をねらう。	犬塚 貴浩(大阪刑務所、法務教官) 谷 真如(内閣府内閣サイバーセキュリティセンター、 参事官補佐) 野村 和孝(北里大学、准教授) 浅見 祐香(目白大学、専任講師) 嶋田 洋徳(早稲田大学、教授)	□	96分
		II					
		III	○				
		IV					
		V					
C-10-5	反省や内省を促す心理職の関わり	I	○	司法犯罪分野の実務においては、対象者自身の不遇体験や発達上のハンディキャップがその非行や犯罪行為の背景に出やすい事例に遭遇することがしばしばある。ここで、対象者の被害者の側面ばかりに目が向き過ぎると、実際の法逸脱や他害行為に対する必要な反省を行うことや、自らの責任を自覚することを促すための支援や関わりが難しくなる場合があり、心理職者としてのバランス感覚が求められる。改めて反省や謝罪といった社会的行為の意味を捉え、こうした行為の支えとなる多様な考え方を学ぶ。さらに、反省が進みにくい事例にみられる対象者の特性や症状、環境の要因といった背景についての理解を深め、反省や内省を促進するための心理職としての対応を理解する。	石川 隆行(宇都宮大学共同教育学部、准教授) 門本 泉(大正大学、教授)	○	45分 24分
		II					
		III					
		IV					
		V	○				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅹつづき 司法・犯罪分野の実務における基本的課題 【11講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-10-6	加害者支援と犯罪被害者支援	I	被害者が生じる触法行為に対して、加害者支援、犯罪被害者（遺族を含む）支援の仕組みを理解し、双方に対して説明責任を果たせるような心理師の知識と技術の習得をねらう。ここでは主に、性犯罪や暴力行為等を取りあげ、加害者側の支援、犯罪被害者側の支援（主として医療施設、自治体施設等）の双方の実際の理解し、要支援者の立場に立つ事件等の理解とともに、包括的支援の枠組みの中で自身の置かれている立場を俯瞰的に理解し、要支援者への支援の向上に活かすことを試みる。さらに、自身に生じやすい「正したい反射」等にも適切に対応できるようにする。保健医療分野における加害者支援、犯罪被害者支援の実際を理解し、双方の支援において活用する支援技術の習得をねらう。（講義と対談）	寺田 孝（川越少年刑務所、法務教官） 齋藤 梓（上智大学総合人間科学部、准教授）	○	40分 33分 37分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-10-7	逸脱行動の背景にある愛着の課題や発達課題の理解	I	非行・犯罪という行動には、その人の全存在が関わるが、近年非行少年が激減している中で、むしろ複雑性トラウマ・発達性トラウマ障害など、彼らの持つ愛着障害や発達障害といった問題がますます複雑・先鋭化している現状がある。近年、成人矯正の分野でもようやくこれらへの治療的働きかけが始まろうとしている。BPSモデルによる全人的理解と働きかけは他分野と同様不可欠であるが、行動変容への抵抗感が強い非行・犯罪の分野において、それは容易なことではなく、それぞれに対する深い知識と洞察が必要とされる。本課題では一つの事例について、「愛着」と「発達」のそれぞれの観点からその問題を読み解いてもらい、いずれの観点からもある意味で全てが説明できてしまうことを知り、BPSモデルによる事例理解が容易ではないことを実感してもらおうと共に、それぞれの観点を活かした支援を学ぶ。（事例検討）	富田 拓（北海道家庭学校樹下庵診療所・ 網走刑務所医務課、医師） 野坂 祐子（大阪大学、教授） 田中 康雄（ミネルバ病院、医師）	□	86分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-10-8	家庭内紛争の中にいる子どもの心理	I	司法領域においては、犯罪ばかりでなく民事事件、家事事件における紛争の解決や調停などにも深く関わる。例えば夫婦の離婚紛争において、親権者の指定や面会交流の実施に際して、両親の紛争がますます高じることもあり、こうした場面での子どもの心理は極めて複雑である。昨今、家事手続法により、子どもの手続代理人という制度が設けられたり、民間における裁判外紛争解決手続（ADR）が活用されたりすることが増えてきている。こうした場面に心理職が関与することが増え、夫婦の調整や、子どもの心理や意向を聴くということ場面が少なくない。子どもの声を聴くことは容易ではない。ここではいかに子どもの心に沿って、事実を捉え、追究していくかについて考えてみたい。	安保 千秋（都大路法律事務所、弁護士） 熊上 崇（和光大学、教授）	○	46分 44分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-10-9	司法関係者等との有効な連携を図るためのアセスメントと関わり	I	司法・犯罪分野の実務においては、他の分野とは目的の異なる独自のアセスメントを求められることがある。例えば、非行少年や受刑者の更生がどの程度進んできているか、再犯、再犯のリスクがどれほどあるのか等を把握することもその一つである。さらに、性被害にあった子どもに事実確認をする司法面接では、一般的な心理臨床の面接とは少し違った側面があり配慮を要する。それらの理解を踏まえた司法関係者との連携はもちろん、支援に関わる多職種との協働をしていかねばならない。加えて、こうした心理職の関わりは目の前にいる当事者のみならず、社会にとっても重要な役割を担っていることを念頭に置いた支援が求められていることを理解しておく必要がある。	寺村 堅志（常磐大学、教授） 仲 真紀子（理化学研究所、理事 立命館大学、教授）	○	38分 57分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-10-10	医療観察法と公認心理師の役割	I	本研修では、医療観察制度の入り口である精神鑑定を補助する心理師として必要な知識として、医療観察制度の背景や理念、運用、対象者の特徴について知るとともに、刑事責任能力鑑定、医療観察法鑑定、入院処遇および通院処遇の各段階における、多職種チームと心理師の役割、リスクアセスメント、治療プログラム等の基本的理解を深める。また、医療観察制度において、実践されている治療的支援（多職種チーム医療、リスクアセスメントとリスクマネジメント、他害防止プログラム、内省プログラム、クライシスプランの作成等）について共有し、司法精神保健領域における心理師の役割についての包括的理解を試みる。さらに、対象となることが多い統合失調症の特徴を理解し、精神鑑定業務に即した基本的知識の習得をねらう。	古村 健（名古屋市立大学大学院、准教授） 西中 宏史（早稲田大学、助教）	○	58分 49分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-10-11	依存症の理解と対応	I	依存症では多様な状態を呈するが、司法・犯罪分野においては窃盗症、物質依存（薬物依存）症、露出症などの対象者と密接にかかわることが多い。本課題では依存症に関する講義を聞くことを通じて、依存症に関する多様な見方、考え方を学ぶ。こうした多様な視点からの学習を通じて、依存症の単なる状態像の理解にとどまらない、依存症の本質とは何かを知り、要支援者に対する関わりを考えたい。さらに、依存症の支援にあたっては、依存症本人だけではなく、その家族への支援がその回復には必要である。依存症についてのアセスメントと支援についてさまざまな視点から考えてみたい。	松本 俊彦（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所、薬物依存研究部部長 （兼任）薬物依存症センター、センター長）	◎	85分
		II				
		III				
		IV				
		V				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群XI 産業・労働分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-11-1	キャリアサイクル理論 ー新入社員のリアリティ・ショックー	I	新入社員の組織社会化の過程で重要な視点を考える。たとえば、リアリティショックの背景となる、個人ー職務適合と計画的偶発性の理解。組織におけるキャリア・ディベロップメント・プログラムによる新入社員への育成計画の説明のあり方、およびメンター制度などとの関連を整理する。	道谷 里英(順天堂大学、先任准教授)	◎	55分
		II ○				
		III				
		IV ○				
		V				
C-11-2	組織論 ー若手社員のうつ反応ー	I	仕事を適切に遂行するための目標管理制度について考える。また、この制度を運営するための上司(中間管理職)の役割について整理する。さらに、目標管理制度と職場での能力開発(OJT)との関連について提起する。加えて、仕事を効果的に遂行するための問題解決方法の基本を確認する。	佐藤 恵美(メンタルサポート&コンサル沖縄、代表)	◎	71分
		II ○				
		III				
		IV ○				
		V				
C-11-3	組織マネジメント論 ー部長職による人材育成ー	I	職業適性検査への過度な期待の問題点と、上司との垂直的交換関係の影響について考える。人材育成の基本となる職場での能力開発(OJT)は、ソーシャルサポートであり、ストレスへの対処の支援ともなる。さらに、管理職の管理スキルを把握して評価するアセスメント技法を紹介する。	佐倉 健史(さんぎょうい株式会社 メンタルヘルス・ソリューション事業室、室長)	◎	68分
		II ○				
		III				
		IV ○				
		V				
C-11-4	リーダーシップ論 ー女性研究職の登用ー	I	女性登用の課題について、研究職を事例として考える。リーダーシップの諸理論を踏まえて、研究者に対するリーダーシップ開発の計画と、リーダーとしての自己認識のあり方を検討する。さらに、管理職と専門職との人事制度等を整理する。	大庭 さよ(メンタルサポート&コンサル東京、代表)	◎	56分
		II ○				
		III				
		IV ○				
		V				
C-11-5	多職種連携 ー関連職種との連携ー	I	事業場内には法的選任義務のある産業医のほか、看護職、心理職といった専門職間の連携が必要である。また職場の管理者や人事労務管理スタッフ、事業場内メンタルヘルス推進担当者など専門職以外の職種との連携、さらには外部の医療機関・カウンセリング機関・EAP機関等との連携も加わる。ここでは、心理職として相談を受けた際の機微情報の取り扱いを意識しつつどのように連携を構築するかという、多職種連携のあり方を整理する。	高野 知樹(神田東クリニック、院長)	◎	55分
		II ○				
		III ○				
		IV				
		V				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群XIつづき 産業・労働分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-11-6	外部EAP論 ―若手の退職事例―	I		外部EAPとして経営的な視点から人事部へのコンサルティングについて考える。経営トップの意思決定は、経営指標(損益計算書、貸借対照表等)を踏まえている。上級管理者は、この方針を受けて、部門の管理を進める。さらに、キャリア入社の場合には、緊張を強めることが起こる。これらの社員への影響から内発的動機づけの阻害を整理する。	田中 勝男(公認会計士田中勝男事務所、 公認会計士・臨床心理士)	◎	62分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					
C-11-7	産業精神保健論	I		多くの専門職は、来談した相談者に対し対応することはある意味慣れている。役割だと認識できている。しかし、産業精神保健の視点ではこの活動は二次予防、三次予防に過ぎず、本来の産業精神保健の目指すところは、一次予防さらにゼロ次予防である。ここでは、勤労者の生き甲斐や労働の生産性の向上に寄与することを目的とした精神保健活動について整理する。	高野 知樹(神田東クリニック、院長)	◎	60分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V					
C-11-8	復職支援(リワーク) 講義 雇用に関わる法とルール 対談 ―労働法と就業規則の枠組を知る―	I		雇用に関わる法には、労働基準法、労働安全衛生法、労働契約法をはじめとする労働法令に加え、裁判所によって形成された判例法理があるが、事業場ごとに作成されている就業規則も、労使関係を規律するルールとして重要である。さらに、労働者の健康と生活を支える健康保険、労災保険といった社会保障制度についても、正しい情報を共有する必要がある。今日、働き方改革をはじめとする国の政策は、労働時間上限規制、ハラスメント防止対策、両立支援(就労と治療・育児・介護)、短時間・有期雇用の公正待遇、副業・兼業の保護、障害者への合理的配慮など、多様で柔軟な働き方や雇用形態にかかわらない公正な処遇の実現をめざしている。	三宅 美樹(トヨタ車体研究所) 講義 三宅 美樹(トヨタ車体研究所) 対談 小島 健一(弁護士) 対談	◎	60分
		II	○				
		III				△	96分
		IV	○				
		V					
C-11-9	多様性の時代の雇用 ―雇用における多様性を考える 人権、倫理、公正との関連から―	I	○	近年の多様性の議論は人権や倫理の問題と関連して、産業・労働分野においても無視することはできない。たとえば、ジェンダー、LGBTQ+、障害者、外国人、高齢者、中途採用、ワーク・ライフ・バランスといった多様な背景を持つ人々や働き方が担保されることが期待されている。また、不確実性の環境下においては、M&A、企業の吸収合併、リストラなどの場面に直面し、時に不条理に雇用が脅かされることもある。ここでは働く場において、多様性、ひいては、人権、倫理の問題をどのように考えるかについて検討する。	白木 三秀(早稲田大学、名誉教授)	◎	51分
		II	○				
		III					
		IV					
		V					

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅻ 各分野で活躍する心理職の仕事を知る 【7講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-12-1	保健医療分野で活躍する心理職の仕事を知る【病院・腫瘍精神科】	I ○ II ○ III ○ IV ○ V ○	先駆的な仕事を行ってきた講師の経験や仕事に対する考えから学び、多様で幅広い心理師の役割やその業務についての理解を深める。本研修では、病院における心理職の実務を考える。がん患者本人のケアから家族のケアまで幅広いサポートを心理の立場で実践している現場の話を聴く。患者とのさまざまなやりとりから、患者の心理のみならず、そこで講師が考えてきたことを学ぶことができる。さらに、精神腫瘍科の医療現場における基礎的理解を踏まえ、コンサルテーション等の実践例を挙げて、がん治療における心理臨床について具体的に学ぶことができる。	厚坊 浩史(公益財団法人がん研究会有明病院、主任公認心理師)	◎	40分
C-12-2	福祉分野で活躍する心理職の仕事を知る【就労継続支援B型作業所】	I ○ II ○ III ○ IV ○ V ○	先駆的な仕事から学び、多様で幅広い心理師の役割やその業務についての理解を深める。本研修では、精神障害のある若者に幅広く支援を展開している心理職の実践を聴く。講師は作業所の運営とともに、作業所と企業間のコーディネート、利用者への情報提供、地域ネットワークでの活動等、多様な業務を展開している。全ては当事者との相談に端を発し、支援の必要性から利用者のニーズに即して展開してきたものである。事業を通じて、精神障害者の暮らしを具体的にサポートするばかりでなく、サポート自体が当事者の心理的な支援に繋がっていくことが分かるだろう。	進藤 義夫(NPO法人 障害者支援情報センター、理事長)	◎	38分
C-12-3	福祉分野で活躍する心理職の仕事を知る【児童養護施設】(1)	I ○ II ○ III ○ IV ○ V ○	先駆的な仕事を行ってきた講師の経験や仕事に対する考えから学び、心理師の役割やその業務への理解を深める。講師は児童養護施設に心理職が配属されるようになり間もない頃から児童養護施設で働いてきた草分けの心理職である。施設職員として働く心理職として、施設が子どもへのよりよい養育を提供できるように、養育の中心であるケアワーカーと共にどのように働いていくことが必要であるのか、さらに心理職は施設内でどのような役割を担うことが求められているのかについて、講師の当初からの長い経験とその中で考えてきたことの変遷を通して学ぶ。	古谷 みどり(社会福祉法人 光の子どもの家、心理士)	◎	36分
C-12-4	福祉分野で活躍する心理職の仕事を知る【児童養護施設】(2)	I ○ II ○ III ○ IV ○ V ○	先駆的な仕事を行ってきた講師の経験や仕事に対する考えから学び、心理師の役割やその業務についての理解を深める。本研修では、児童養護施設の心理職として、何に悩み、葛藤してきたか、それを自身の仕事の中でどのように捉え直し、答えを見つけてきたのか、について話を聴く。また、施設内の危機的な状況を多職種職員との協力のもと再構築してきた話題もある。チームとしての取組の中で心理職として果たした役割についても考えてみたい。施設で働く者のみならず、多様な職場で働く心理職としての悩みや迷いにどのように向き合えば良いのかという基本的なスタンスを考えるヒントになるであろう。	網島 庸祐(社会福祉法人 鹿深の家、心理士)	◎	48分
C-12-5	教育分野で活躍する心理職の仕事を知る【特別支援学校】	I ○ II ○ III ○ IV ○ V ○	先駆的な仕事を行ってきた講師の経験や仕事に対する考えから学び、多様で幅広い心理師の役割やその業務についての理解を深める。本研修では神奈川県教育委員会の取組として特別支援学校で教諭職として採用されSCの業務を行っている取組を紹介する。一つは特別支援学校におけるSC配属が児童・生徒の学校生活にもたらす意味と可能性について、もう一つは、学校で心理専門職がフルタイムで勤務することによる可能性について、この2つの点が新たな働き方を考える機会となるだろう。	林 大介(神奈川県立相模原支援学校、教諭・臨床心理士)	◎	36分

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅻつづき 各分野で活躍する心理職の仕事を知る 【7講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-12-6	産業・労働分野で活躍する心理職の仕事を知る【一般企業・人事部】	I	○	先駆的な仕事を行ってきた講師の経験や仕事に対する考えから学び、心理師の役割と業務への理解を深める。ここでは心理職としての知見を会社での企業活動にどのように活かしていくのかという点を考えてみたい。講師は心理職としての勤務を経て、企業人事部に所属して心理専門職として働いている。主に従事する相談業務ばかりでなく、企業のメンタルヘルスに関わる多様な取組として展開している。企業の基本的な考え方と、臨床心理学的なスタンスとを融合させ、企業において具体的な支援の取組に繋げてゆく模索や工夫について話を聴く。企業内における心理職の活躍の可能性について新たな視点が提供されるであろう。	藤本 航平(住友電気工業株式会社 人事部)	◎	42分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V	○				
C-12-7	産業・労働分野で活躍する心理職の仕事を知る【心理カウンセリング/人事コンサルティング会社運営】	I	○	先駆的な仕事を行ってきた講師の経験や仕事に対する考えから学び、多様で幅広い心理師の役割やその業務についての理解を深める。ここでは産業・労働分野における心理職の実務を考える。講師は当初の会社勤めの経験から社員を支えることの大切さに気づき、様々な資格の取得とともに、臨床心理を学ぶに至る。その経緯を聴き、心理特有の業務にとらわれない広い視点での仕事の展開を知る。また、ハラスメント対策についてのこれまでの取組、経営者としての実績も参考になり、キャリア形成としての学びにもつながるであろう。	涌井 美和子(合同会社オフィスプリズム、代表)	◎	40分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V	○				